

## 1.「災害時の食の支援に関する検討」 （災害時の炊き出しの栄養学的見直しを通じた大学と地域の連携モデルの検討）

[2014年1月8日(水)]

2011年の東日本大震災では、多くの被災者が避難所等での不自由な生活を長期に渡り余儀なくされました。その際、多くの被災者の食生活を炊き出しが支えましたが、同時に、食の支援に関して、普段から準備を整え備えておく必要性が再認識されました。

兵庫県は阪神・淡路大震災の経験があります。その経験を生かし、「災害時の食の支援に関する検討」を行い、より健康的で衛生的な炊き出しを行えるような体制づくりと災害時炊き出しのマニュアルづくりを検討することは意義あることです。



協力して炊き出しの準備をしている学生たち



配給の準備に取り掛かる学生たち

兵庫県立大学環境人間学部の食環境栄養課程は、管理栄養士の養成をしており、「食のスペシャリスト」の卵たちが学んでいます。その環境を生かし、環境人間学部のある姫路市と連携し、「災害時の食の支援に関する検討」を順次行っていく計画です。連携に際しては、単なる一般的な食の支援にとどまらず、姫路モデル(姫路アセスメント、姫路スタンダード、姫路マニュアル)の趣旨のもとで姫路市の特徴を踏まえた支援が可能によう考慮していく予定です。学生の学びを生かし、実際に災害が起こったときに素早く行動を起こせるようにするために、まず、災害時を想定した炊き出しを実践しました。



災害時に使用できる紙製の容器を組み立てる学生たち

その結果、参加者からは、「今後も続けて欲しい。災害時の食器をどうするのか、ゴミの処理が必要ということなど災害時に備えて考えておくべきことがたくさんあることに気づいた。貴重な体験でした。」等の意見が聞かれ、運営スタッフとしてかかわった学生からは、さらに多くのさまざまな気付きの声が聞かれ、実践することの大切さや学びを生かす場としてのやりがいを感じた、という意見が聞かれました。

### プロジェクトリーダーからのメッセージ



環境人間学部  
食環境栄養課程  
吉村美紀教授

播磨地域は文化と歴史に根ざす豊かな地域です。自然豊かな郊外地域での農山漁業の営みと、都市部を中心とする分厚い産業基盤があります。多様な資源と幅広い技術を戦略的に地域再生モデルにつなぎ、「モノづくり」の産学公連携を「コトづくり」へと発展させることが狙いです。キーワードは「食」。「食」は観光、まちづくりなどの様々な生活課題に深く関わっています。都市近郊で収穫される海の幸、山の幸と、都市で洗練されて来た「ものづくりの技術」との出会いの中から、新たなライフスタイル、生活産業を創り、課題解決に挑戦しましょう。